
イミぐみっ！

COCO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イミぐみっ！

【Nコード】

N8042Y

【作者名】

c o c o

【あらすじ】

周りの人間から忌み嫌われた人が集まる『イミクラス忌組』
そこは異能（魔法）の力を持った人々の集まりだった！！
そんな彼らが、自分の運命に立ち向かう話です。

序章：ココから。（前書き）

チヨットした暇つぶしに書き始めた小説です。
表現の仕方が下手ですが、楽しんでくださると幸いです。

序章：ココから。

そこは、暗くて、寒くて、寂しい場所だった。

コンクリート剥き出しの壁は、ヒンヤリと冷たく、その部屋には、窓も光源となる物さへなかった。

部屋とは呼べないそこにあるのは、元の色が分からないくらいに使い古されたベッド、水を垂れ流しにしている割れた洗面台、全く掃除されたことの無いであろう水洗トイレ。

そして

一人の少年。

何年も洗っていないその髪は、腰のあたりまで伸び、櫛で梳いたことがないのか、ぼさぼさしており、今は、じつと壁のほうを凝視していた。

今だけではない。

その少年の光を映すことを許されない濁った瞳は、この部屋に来た時から、ずっとその壁を見ていた。

外は吹雪。

コンクリートに囲まれた部屋で、ワンピースのような服一枚の彼は、

ココに居ることを疑問に思わない。

それは、生まれた時から自分が生まれてきてはいけない存在だと知っていたから。

一生出ることのできない檻の扉が開くのは、クソみたいな食事という名の生ごみが運ばれてくるときだけ……。

食事は先ほど来たばかりで、今は開くはずのない木製のしかし壊すことはできないその扉が開かれた。

来たのは、いつも食事を運んでくる軍服の人間ではなかった。

その来訪者は薄紫のローブを着て、ローブについたフードを深く被っているため顔は見えない。

しばらくは二人とも無言だった。

いきなりの来訪者は腕を組み、無言の彼を一通り観察した後、囁く。

「私と一緒に来ないか？」

彼はそう言った来訪者の顔をさっきまでとは違う純粹で無垢な光を宿した瞳で見つめ返した――。

序章：ココから。（後書き）

また暇があつたら投稿したいと思います。
続きも読んで下さると嬉しいです。

協調性ナシ。(前書き)

さっき投稿した続きです。

やっと主人公の名前出てきますw

時代背景も書けるといいなあと思っています。

協調性ナシ。

劉歴198年

海に囲まれたエルテミス大陸。

そこには、いくつかの国が点在している。

そのうちの1つカルミア国は、大陸の西側に勢力を広げていた。

カルミア国は歴史の上で何度も戦争を経験しているため、完全実力主義の軍事国だった。

今は、表面的には戦争は起こっていないが、近々大きな戦争が起こりそうなことを国民は肌で感じていた。

そのため、カルミア国の学校では、戦争に備え優秀な人材を育成・確保するため、軍事訓練・実地研修を授業に取り入れている。

ここサーシエル学院もその一つである。

その学院の中庭にあるブナの木の上一人の少年が寝そべり、
熟睡していた。

まだ、授業中にもかかわらず気持ちよさそうに寝ている。

そんな彼のもとに一人の少女がやってきた。

「ユウ。またこんなところで寝て!!
風邪ひいても知らないよ!?!」

そんなことを言う彼女にユウと呼ばれた少年は、めんどくさそうに
答える。

「僕は、風邪なんかひきませんよ。レン。」

返事した後はまたすぐに睡魔に引きずり込まれそうに……

「って寝るな!?!?!?!」

なるユウをレンが叫んで止める。

これがここ最近の二人の会話だった。

ユウは、数日前この学院の理事長が連れてきた転入生で、レンが彼のお世話係を頼まれた。

レンは最初、理事長の指名だったので快く引き受けたが、このユウという新生は全く授業に出ない。

しかもその責任をレンの指導不足だと押し付ける。

最初のほうは、すぐに謝ってきたため許したし、お詫びにと有名な高級店の菓子を持ってきてくれたためいいやつだと評価していたのだが、次の日から同じことの繰り返し。

一回やつのことで教室に引きずって行ったところ、『つまらない暇です。』と一蹴。

体術を教える教師も顔を真っ赤にして怒っていたが、彼の体術に圧倒。

その教師に『もう君は来なくていい』と八つ当たり気味に言われ、彼は『そうですか。』と一言。

他の教師たちからも苦情が相次ぎ、『君は昼寝でもしておけっ!!』と言われれば、それを一日中実践してしまう始末。

全くもって協調性が欠けている。

それが改めてレンが下した評価だった。

しかし、彼の体術は、この辺りではあまり見ない型だった。

体術で優れていると思っていた。いや、教師にもそういわれていたレンがこいつには負ける。

そう感じるほどだった。

だからこそレンは、それをどこで習ったのか知りたくなった。

この間、教えてくれないだろうと思いつながら聞いてみたところ、案の定『さあ?』と軽く流された。

それでも気になり、盗むために観察してみよう!という事で彼の私生活を観察し始めた。

ストーカー……………。

いやいや、これは違う。

敵の情報を集めようとしているだけだ。決して変質者^{ストーカー}ではない。

そう！いわゆる間諜^{スパイ}なのだっ！

と自分を確認しつつ、彼を見つめた。

二、三日してくると彼の行動パターンが分かってきた。

朝は7：00起き。9：00就寝。三食きちんと食べ、洗顔・歯磨き。

その他すべて昼寝……。

どんだけ寝てんの！？

と思わずツツコンんでしまいたくなるくらいに睡眠時間が多かった。

それでは、体術を盗むことができないため、いつも彼を起こしに行っている。

今日もそのために彼の所に来ていた。

が、今のところ収穫無し。

なのでレンは、明日も観察しなきゃ！と意気込んでいた。

協調性ナシ。(後書き)

ユウ君が主人公なのですが、レンちゃん視点になってしまいました。
次からはユウ君視点で書いていきたいと思います!!
また読んで下さると嬉しいです!!

生きて帰ってくればいい。(前書き)

話に矛盾が出ないように書いてますが、出ていたらすみません。
今回は戦争の始まりです。

生きて帰ってくればいい。

『リーングーン』

その日、サーシエル学院の一番高い位置にある鐘楼^{しょうろう}が辺り周辺に鳴り響いた。

その音は人が沢山死ぬ予鈴でもあり、人殺しを始める始まりの合図だった。

そう。戦争が始まるのだ。

この鐘の音を合図に

悲しみと憎しみしか生み出さない

戦^{いくさ}が

今

始まる。

学院の地下にある“作戦会議室
C^{カル}a^ルl^マm”では数人の初老の重鎮
たちが声を潜めて話し合っていた。

では、彼を実践投入する方針でいいかな？

彼を使うのはいささか危険では？

問題ない。理事長から許可は出ている。

そうか。この戦、彼を使えば我々が買ったも当然だな

と、一人が言いフツツと笑う。

それにつられて周りにいた重鎮たちも含み笑う。

しばらく、その部屋には笑い声が満ちていた。

同時刻：【サーシエル学院6組教室】

そこでは、これから起こる戦のためのブリーフィングが行われていた。

「6組は、最前線で戦うことになる。

君たちにとっては初めての戦だろう。

この為に体術や武術、武器を使った訓練をやってきた。

だが、戦とは今までの授業とは全く違い、一瞬の油断で命を落とす。

そのことを忘れず、全力を尽くしてほしい。

我がカルミア国のために……。

君たちの幸運を祈る。」

6組担当のフェルは言い終わると、自分の役割を果たしに教室を出た。

残された生徒たちは、誰もが不安そうに顔を見合わせていた。

戦が起こることは分かっていたが、こつも早く起こるとはだれも思っていなかった。

戦いに出なければいけない。その使命は彼らの心を押しつぶそうとしていた。

ただ一人を除いて……。

ユウはそんなことは関係ないとばかりに、今も机に肘をつき熟睡していた。

そんなユウの態度を見てレンはユウを叩き起こす。

「ユウ。なんでこんな時に熟睡できるのよ！」

緊張感無さすぎっ！」

そんなレンをまっすぐな目で見つめ返ししながら、聞き返した。

「こんな時って、どんな時ですか？」

間拔けた声にクラスメイト一同啞然。

「死ぬかもしれない戦に出なきゃいけない時！」

レンがそう言ってもユウは首を傾げるのみ。

「生きて帰ってくればいいじゃないですか？」

その一言に再び一同啞然。

軽いショックから抜け出すと、みんなは、もう相手にしたくないとばかりに戦の準備に取りかかった。

ユウは、レンのほうを向いて微笑みながら言った。

「さあ、レン。」

「僕たちも準備しましょう。」

生きて帰ってくればいい。(後書き)

ユウ君マイペースですね。

シリアスばっかなので早くコミカルな書きたいですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042y/>

イミぐみっ！

2011年11月24日18時53分発行